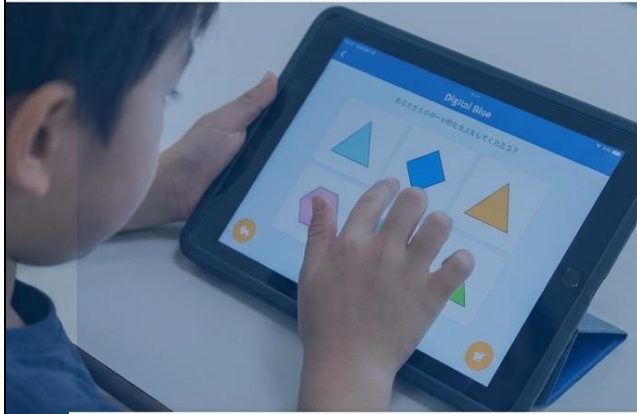




## AI型教材の活用について

### 令和8年度の新たな学びの形

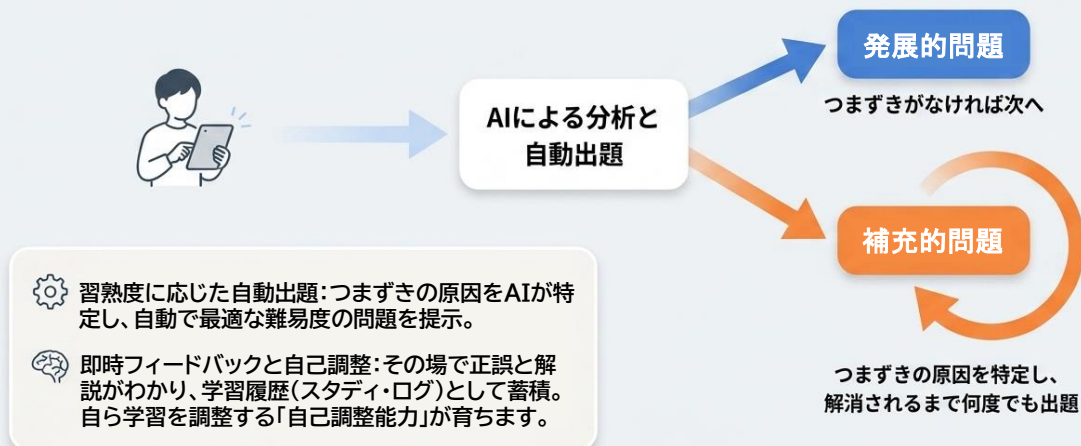
習志野市教育委員会 学校教育部 学習指導課・総合教育センター

本日は「AI型教材の活用について—令和8年度の新たな学びの形」というテーマで、本市が推進するAI型教材の導入と、それによる「個別最適な学び」の実現についてご説明いたします。現在、社会はAIやビッグデータが日常化するSociety 5.0時代を迎えています。こうした変化の中で、子供たちが自律的に学び、可能性を最大限に引き出すための教育改革が求められています。本市では、令和8年度からAI型ドリル教材を公費で更新し、授業や家庭学習での積極的な活用を推進しています。



導入の最大の目的は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることにあります。「個別最適な学び」とは、子供一人一人の特性や学習到達度に応じた「指導の個別化」と、子供自身の興味・関心を広げる「学習の個性化」を指します。一方で、多様な他者対話し、新しい価値を創造する「協働的な学び」も不可欠です。AI型教材を単なる「効率化のツール」としてではなく、これら二つの学びを往還させ、子供たちが自ら学びを調整する力を育むための基盤として位置づけています。

## AI型教材の最大の利点 一人一人の習熟度に応じた「個別最適な学び」の実現



NotebookLM

AI型教材の具体的な機能とメリットについてです。最大の特徴は、AIによるスタディ・ログ(学習履歴)の分析と自動出題機能にあります。従来の画一的なドリルでは、分かっている問題を何度も解いたり、つまづいたまま先に進んでしまったりすることがありました。AI型教材では、標準的な問題を解いた際、正答すれば「発展的な問題」へ、誤答すればAIがつまづきの原因を特定し、解消されるまで「補充的な問題」を自動で提示します。これにより、即時のフィードバックを受けながら、一人一人の習熟度に最適なペースで学習を進めることが可能になります。

## AI型教材がもたらす+αの効果



### 【保護者の負担軽減】

- **経済的負担の軽減:**学校でのドリル類の一律購入を廃止。公費によるAI教材への移行に伴い、家庭で苦手な部分を個別に選んで購入・学習できる体制へ。
- **物理的負担の軽減:**AI教材への集約により、児童生徒の日々の荷物の持ち帰りを大幅に軽減します。



### 【教員の業務削減】

- **採点・集計業務の自動化:**自動採点や学習履歴の即時集計により、プリント印刷や丸付け業務を大幅に削減。
- **児童生徒と向き合う時間の創出:**削減された時間を個別支援や授業改善など「教師にしかできない」付加価値の高い業務へ変換します。

学びの質向上に加え、AI型教材は保護者や教員にも大きなプラスの効果をもたらします。まず、保護者の方々にとっては「経済的・物理的負担の軽減」です。これまで学校で一律に購入していた紙のドリルやテスト類の一部を公費負担のAI型教材に置き換えます。これにより、家庭では「苦手な部分だけを個別に選んで購入・学習する」といった柔軟な対応が可能になります。また、教材をタブレットに集約することで、日々の荷物の持ち帰り負担も軽減されます。教職員にとっては「業務の削減」が大きな利点です。自動採点や学習履歴の即時集計により、丸つけやプリント印刷に費やしていた時間を大幅に短縮できます。削減された時間は、子供たちへの個別支援や授業改善といった、教師にしかできない付加価値の高い業務へ転換していきます。

## 習志野市の方針

 $\times$  $=$ 

新しい学びのスタイル

AI型ドリル

ノート

### 「AI型ドリル」と「ノート」の併用

全てをAI型教材で行うものではありません。「書く力」も大切に、  
デジタル（効率・個別最適化）とアナログ（定着・思考の整理）の良さを掛け合わせます。

漢字学習

AIの出題・自動採点機能で習熟度に合わせた  
反復練習を行いつつ、「ノートに書き込む」こと  
で字形や書き順の確実な定着を図ります。



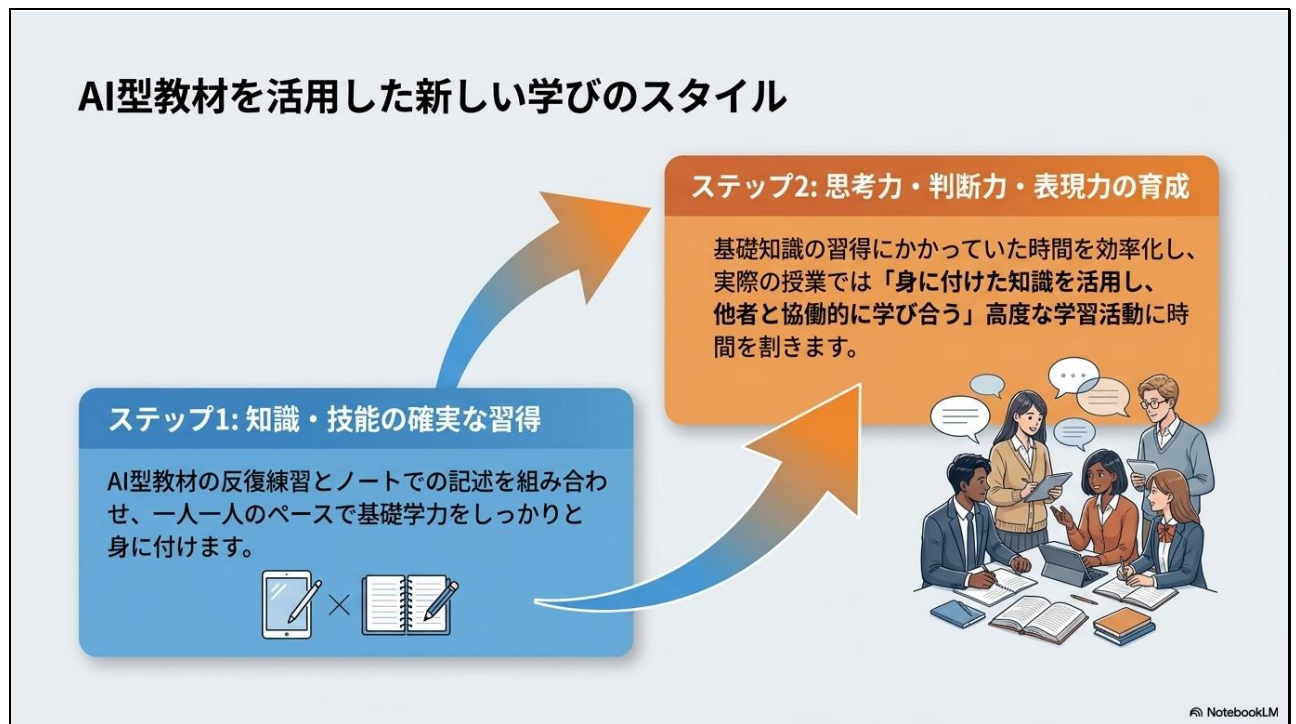
計算問題

AIで基礎計算を出題しつつ、「計算の途中式や  
筆算はノートに書く」ことで、思考のプロセスを  
可視化します。



NotebookLM

本市が特に重視しているのが、「AI型ドリルとノートの併用」です。「全てをデジタル化すればよい」というわけではありません。特に低学年においては、書き順や止め・はね・はらいといった「書く力」の定着が学びの基盤となります。そのため、漢字学習や計算の途中式などは、あえて「ノートに書く」活動を維持します。デジタルの「効率・個別最適化」と、アナログの「定着・思考の整理」というそれぞれの良さを掛け合わせることで、確かな学力を保証していきます。



AI型教材の導入は、授業のスタイルそのものも変えていきます。ステップ1として、AI型教材とノートを組み合わせることで、基礎的・基本的な知識・技能を、一人一人のペースで確実に習得します。そこで効率化された時間をステップ2に充てます。つまり、身に付けた知識を活用して、他者と協働的に学び合い、課題を解決する「思考力・判断力・表現力」を育む高度な学習活動を授業の中で充実させていくのです。このように、知識のインプットをデジタルで支え、アウトプットや対話を通じて協働的に学びを深める「ハイブリッドな学び」を目指します。

## 実践例（小2算数）：個別最適な学びの風景



それぞれのペースで進めるAI学習



画面に直接思考の過程をメモ

デジタルツールを活用することで、即時フィードバックを得ながら、  
一人一人が自分の課題に集中できる環境を実現しています。

AI NotebookLM

各校での取り組みの事例を紹介します。画面に映っているのは小2の算数の授業です。この授業は授業の最後に反復練習としてAI型教材を利用していました。先生が課題を予約配信し、学習したことをそれぞれのペースで取り組んでいました。画面に思考の過程をメモしながら取り組む子どももいました。子どもたちは即時フィードバックを得ながら、集中して学習に臨むことができます。この学校では子どもがタブレットを取り出して、ミライシードを始めるまでに1分ほどしかかからず、普段から継続して取り組むことで運用の改善につながります。

## 実践例（小2算数）：協働的な学びと書く力の育成



ノートを囲んでの活発な意見交換



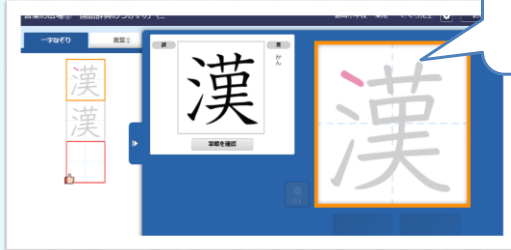
板書とノート指導による確かな定着

AIが効率化した時間を活用し、対面ならではの対話や、  
自分の手で書き・考えを深めるアナログな活動をより一層充実させています。

授業全てをタブレット上で行っているわけではありません。ノートを用いて自分の考えを書いたり、周囲と意見交換したりすることで思考力・判断力・表現力を育成します。

## 実践例(小3漢字):AI型教材とノートの併用

### ①読み方の確認(復唱)



音読み訓読み  
の確認

②熟語や例文の確認(復唱) →  
学年相応のものを考えたり、ミ  
ライシードから引用したりする

### ③書き順の確認(ミライシードの筆順)



スピード調整可能

続いての事例は小3の漢字です。AI型教材とノートを併用し、書く力の育成も大切にします。ミライシードには書き順ガイドがあるので、従来のドリルよりも書き順に意識を向けることが可能です。

## 実践例(小3漢字): AI型教材とノートの併用

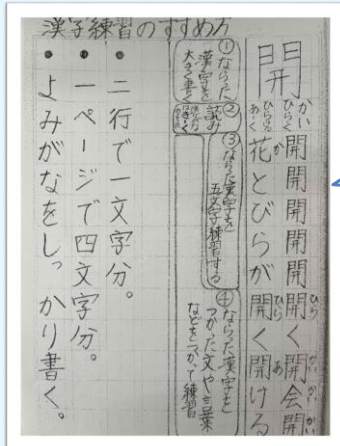
- ④書き順チェック (指を上げてこちらに見えるように)
- ⑤その漢字を使った熟語や文の発表
- ⑥一字なぞり→言葉①②



全てをAI型教材に任せるのではなく、教師がAI型教材を授業の一部として活用することで、確かな学力の育成につなげます。AI型教材の利点としては文字のバランスなどをチェックしてくれる機能があるので、丁寧に書こうとする子どもが増えたという報告があります。

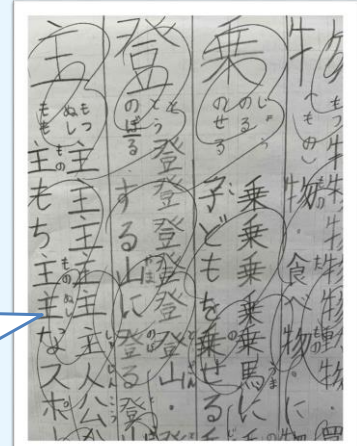
## 実践例(小3漢字):AI型教材とノートの併用

### ⑦漢字練習ノート（授業や宿題で）



漢字練習帳の  
はじめのページにに練  
習見本を貼りそれを  
見ながら進める

児童のノート  
慣れてくると見本なし  
で書けるようになる

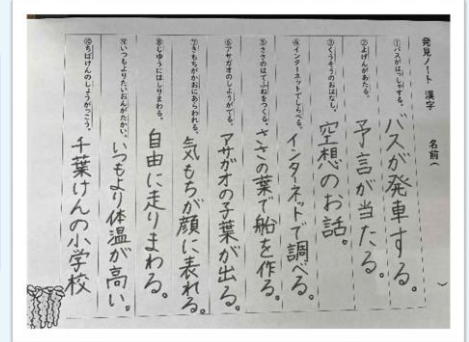


### ⑧単元の書きドリル、読みドリルをミライシード上で行う

また、それに伴い、漢字練習ノートの文字もきれいになるという効果も見込めます。教師が漢字練習張の使い方を見本として示すことで、子どもはスムーズに漢字練習に取り組むことができます。段階を経てミライシードの書きドリル読みドリルを利用すると効果的です。単元ごとに漢字の学習を課題配信すれば、だれが終わっていないかすぐわかると同時に丸つけ時間の軽減にもつながります。

## 実践例(小3漢字):定着の確認等

- ・ミライシードの書きドリルの中から10問選択し、テストを作成(プリント)
- ・テストと同じ内容を宿題で出しノートに書くことで、漢字の定着を目指す
- ・学年でテストの作成を分担すると負担軽減



その他 漢字練習や各教科のノート名人を掲示し、ノート指導にも力を入れている

漢字の力が定着しているかを確認することも大切です。ミライシードをもとに、漢字テストを作成し、事前に提示することで、子どもたちが進んでミライシードやノートで練習を重ねることができます。先生方には少し負担を増やしてしまいますが、自動採点により生まれた時間を利用したり、学年でテストの作成を分担し、それをストックして共有したりして負担軽減につなげていただければと考えています。(Y:)フォルダーにも練習問題が格納されていますので、ご活用ください。ほかにも掲示物等でノート指導を行うこともできます。

## 円滑な導入に向けた課題

先行調査で見えてきた現場のリアルな声に真摯に向き合います。

### 保護者への周知不足による不安

⚠ 懸念：「紙に書かなくなるのでは？」「学習状況が見えにくい」

### 教員への周知不足による運用面の問題

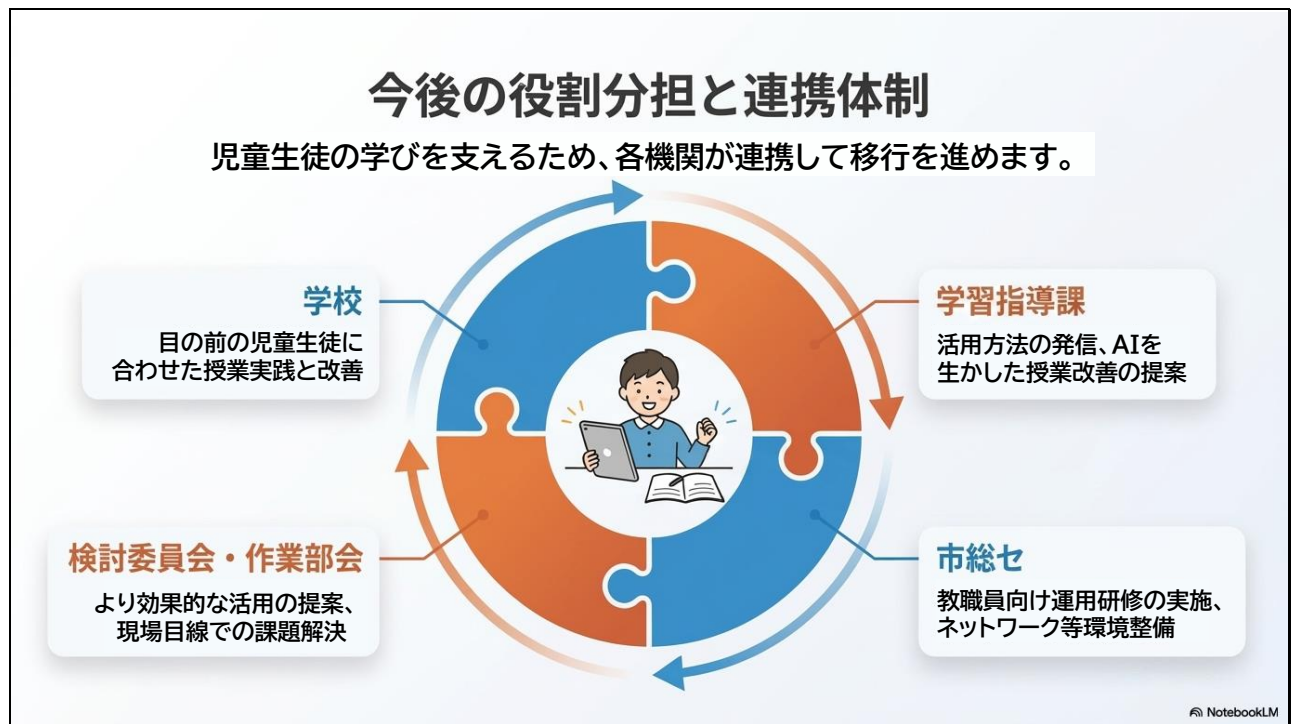
⚠ 懸念：効果的な活用方法や、思考力・判断力・表現力の評価について。

### 導入初年度の子供たちのやりづらさ

⚠ 懸念：システム上の漢字判定の厳しさや、端末操作への不慣れによる意欲低下。

NotebookLM

利点がある一方で、先行調査や現場の声からは、解決すべきリアルな課題も見えてきています。まず、保護者の方々からは「紙に書かなくなるのではないか」「家庭での学習状況が見えにくい」といった不安の声が寄せられています。また、教員側にも、効果的な活用方法やデジタルでの評価に対する戸惑いがあります。さらに、導入初期には、システムの判定の厳しさや端末操作への不慣れから、子供たちが「やりづらさ」を感じる場面もあります。これらの課題を正面から受け止め、一つ一つ丁寧に解消していくことが、円滑な移行には不可欠であると考えています。



これらの課題を乗り越え、実効性のある体制を築くため、役割を整理しています。「学習指導課」は、活用方法の発信や、AIを活かした授業改善の具体的な提案を主導します。「市総セ(総合教育センター)」は、教職員向けの運用研修や、安定したネットワーク環境の整備を担います。「副教材の在り方検討委員会・作業部会」は、現場の目線に立って、副教材の精査やAI型教材のより効果的な活用案を練り上げます。そして「学校」は、目の前の児童生徒に合わせた授業実践と改善を繰り返します。これら四者が密接に連携し、市全体で学びの質を支えてまいります。



最後になりますが、私たちの取り組みはすべて「児童生徒の学びのために」あります。単なるICTの導入を目的とするのではなく、子供たちが自分の良さを認識し、主体的に未来を切り拓く力を身に付けるための手段として、この新しい学びの形を追求してまいります。誰一人取り残すことなく、全ての子供たちの可能性を広げるため、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。